

行されていた。この本は丸木・丸山・黒川・大石氏らと異なる立場の人達による著者である。他の8冊の本には見られない項目もあって、貴重な文献であるが、戦後の紙で質が悪く、変色が甚だしい。

以上9冊のコンショの専門書について簡単に紹介してきたが、この頃、他にどのような本が発行され、利用されたのか私には分からない。おそらく私が集めた本は極一部かも知れないが、昭和10年代から戦後にかけてコンショ専門の単行書は少なかったのではないだろうか。終戦を挟んで数年間、食糧難に苦しんだこの時代に、コンショの専門書はどのような役割を果たしてきたのか、私なりに考察してみたかった。

この時代ほど、コンショに国民が関心をもったことは無かったと思われる。全国の試験研究機関や大学でも研究は進められたが、試験場では多くの作物を平行して研究しなければならなかった。しかし、民間の研究者は集中的に自分の経営の中でコンショ研究に努めたのではないだろうか、したがってこのような人達が本を書くことになったのであろう。

ここにあげた本で見える限り、篤農技術は説得力があって、国民の共感を得たように思えてならない。農事試験場の試験結果も引用されており、大きく役だっているのだが、試験場の人が書いた本はA-45とA-57の外には見当らなかった。

◎ジャガイモと映画

『バスター』

イギリスのチップス（日本のフレンチフライ）はどの食堂でも、ソーセージなどと一緒によく食べられています。メガホンのような形の菓半紙にフレンチと魚を入れたフィッシュ・アン・チップスも立ち食いで人気があります。

犯罪史上で有名な大列車強盗事件を脚色した映画『バスター』で、メキシコに高飛びした主犯バスター（フィル・コリズ）に妻ジェーン役のジュリー・ウォルターズが当然のことながら自然に、「あしたはステーキとチップスがどうしても食べたいの」と口から出てきます。

「そんなこと言ったら、ここはイギリスじゃないんだぜ、そんなものあるもんか」との答えが返るシーンがあります。ステーキならどこでも食べられますので、彼女はチップス

が食べたいのです。日本人なら外国生活していて「銀シャリ」が食べたい、と言うのに相当しましょう。イギリスで言うチップスは飯（主食）とも言うべきもののなのです。

『シェーン』

アメリカ人の気楽な会話では、ジャガイモのことをスパッドspudとも言います。

もともと、小鍬（くわ）またはジャガイモを掘るために使ったスピード状の鋤（すき）から転化したものです。

映画『シェーン』の中でも、シェーンに向かってルーフが次のように言いました。

We'll all start hoein'spuds.
Is that it?

spudは、この外、Society of the prevention of an unwholesome diet（不健康な食物を阻止する会）の略でもあります。実はこの会は、ジャガイモがイギリスに入ってくるのに反対したグループでした。

（浅間和夫）

